

文学活動における多文化受容について

韓国と日本における近代化と文学

アジアという地域において、日本と韓国とでは、その近代化のなかで西洋文化（異文化）を受け入れるうえで、共通した土台とも土壌というものがあった。もし、それを一言でいうなら、儒教的倫理観というきわめて志が高く、自己利益の追求の念が薄く、高潔とも、理想的ともいえる孔孟の教えである。

日本では、江戸時代には全人口の割に満たない割合でしかない武士を、あらゆる身分の人々が理想的モラルを体得した階層とみなして、こうした言葉で賛えた。

人は武士、花は桜木、魚は鯛

みな、それぞれの分野での最高をさす、武士は儒教の精神を日々の心のありどころの中心とし、潔癖さ高邁さ優雅な品格が心身に備わることが必須のこととしたため、明治になると、学校教育（日本の義務教育の整備と法制度化は西洋の列強にも先んじていた）で武士道精神は軍国主義とはまた異なる次元で日本人に施されていた。司馬遼太郎著『坂の上の雲』は、そのことをよく示した小説である。

その頃の韓国では、朝鮮時代の学問的充実はずばらしく、都には成均館がおかれ、中等教育機関として四部の学堂、地方の処々に郷校がおかれ、学塾の質と量はめざましいものがあつた。それらの出身者であり、運営にあつていたのが両班であるが、彼ら両班の数は多く、日本の武士階級の身分の者が人口の割に過ぎないことは先に述べたが、日帝時代に朝鮮総統府が調査したデータによると、韓国の人口の約七十パーセントにも及ぶ人々が両班の身分を称していたという。実に多くの人々が儒教的モラルに支えられたプライドを持っていたといえよう。

私が出張先の中国の北京から帰って、まもなくはじめて韓国にきて驚いたことがある。北京では朝夕の通勤時には自転車の混雑ぶりをみたが、韓国では自転車をみるのが皆無といってよかった。私自身も自転車に乗ることが好きなので、不思議に思い、韓国の学者に尋ねると、次のような答えが返ってきた。

両班は走らない

実に明快な答であつた。日本の武士もそうであつた。日本の時代小説作家の海音寺潮五郎が祖母の思い出語りに「侍というものはりっぱなもので、雨が突然降り出しても、決して小走りになつたりせずに、何事も無いかのようにしずしずと歩いたものだ」といったことを紹介して、武士というものの心のありどころの一端を述べている。儒教倫理が日常茶飯事にまで及ぶ様をみるかのようなのである。

こうした例は、他にも多くみられるであろう。韓国における開化党の金玉均が日本を

訪れた時に、大変に高い評価を日本の知識人たちが贈っている。それは、金玉均が非常に高潔で典雅、またおだやかななかにも、高い理想をもっていることが、その一挙手、一投足にあらわれていたからである。

そうした韓国と日本との伝統的に共通性の多い、儒教的精神を基盤としたアイデンティティをもった人々の子孫が近代化で直面した問題も、また共通のものであったことが、金玉均の思想や行動にもあらわれているといえよう。また金玉均の理想も、日本人にはよく理解できたといえよう。金玉均のいうところの

アジアにおいて日本が英国ならば朝鮮はフランスたるべきであるということも、よく知られた言葉であるが、当時の韓日両国の人々にも、そうしたことを理想とできる、共通のアイデンティティが無ければ成り立たない発想であろう。

やはり同じ頃の中国で近代化をめざしていたグループに変法派があり、康有為・譚嗣同・梁啓超らがあるが、彼らの特に熱心に進めたのは近代的学校の設立(京師大学校、後の北京大学)や新聞の発刊(中外新聞・時務報)などであるが、康有為は興味深いことを述べている。「英語やフランス語で書かれたものを読んで理解するのは大変だが、日本では西洋のすぐれたものはすぐ翻訳される、だから日本語に訳されたものを読めばいい。日本語は漢字を用いているので、他国語に比べて慣れると大変に意味がとりやすくてよい。」という、金玉均もそれに似たことを述べている。改めて、漢字文化圏での意志相互通用を考えさせられるし、共にアジアで近代化に悩んだ国々があったことは感慨が深い。

両班の人々が日本の武士(士族)と同じく本貫地(故郷・出身地)への深い愛着と誇りを持っていたということも、実は近代化のなかでは見逃してはならないテーマであると私は考えている。

故郷の喪失という問題である。日本の近代文学では故郷の喪失、自分の生まれ育った名家の没落ということは繰り返しモチーフになり、テーマになり、作家の心象風景となる。所有財産として先祖代々受けつがれてきた土地の喪失は、同時に自分の代で失なわれてしまう、かけがえのないものの喪失であった。また、それは自らの誇りの喪失でもあった。韓国では日帝時代に土地の収奪が朝鮮総督府によって組織におこなわれたし、日本では近代化の経済的矛盾で多くの名家が没落した。日本で、島崎藤村によって傑作「夜明け前」が書かれたのはこうした背景によるが、韓国で、その翻訳や翻案小説がでたのもアイデンティティの共有ということなしには考えられない。

次に、それらの地方出身の青年たちがめざしたのは、近代的教育のなかで高等教育を受けて世に出ていくということで、一つのパターンが生まれる。韓国での最近の出版物で、韓国の近代から現代のなかで活躍した多くのジャーナリストの列伝の本があり、それを一見して驚いたのは、日本の早稲田大学・慶応大学・日本大学・中央大学などの出

身者が多いことであった。日本の近代のジャーナリストとまったく同じコースを彼らが歩んできたことである。

韓国の留学生が早稲田大学や慶応大学といった私立大学に学び、日本の地方出身の学生のように、卒業後、ジャーナリストとなって活躍する、これは韓日のこれからの研究テーマの一つともなりそうである。

最後に、今回述べておきたいのは、定期刊行物(出版物)の郵送(郵便制度の確立)という近代的システムによって、例えば明治期の短歌のみならず文芸活動に大きな運動となった「明星」が韓国にも及んでいることである。「明星」は与謝野鉄幹・晶子によって編まれた短歌雑誌として名高いが、これによって、近代的自我に目覚めた韓国の地方名家の青年少女も少なからずあって、短歌を投稿しているということである。これらはこれからの研究テーマとしてはとても重要かと思われる。

K C I